

(消化器内科学)

中村真一

食道胃静脈瘤は肝硬変による門脈圧亢進症として出現し、ときに致死的な出血をきたす疾患である。食道静脈瘤治療は現在、内視鏡的治療が主流であり、内視鏡的硬化療法 (EIS)、内視鏡的静脈瘤結紮術 (EVL) などが実施されており、その進歩、普及により出血例の救命率は向上し、予防例も安全に治療されるようになった。今後は合理的で安全な治療が望まれており、そのためには血行動態診断が重要である。1998年7月から2006年8月に超音波内視鏡検査 (EUS) で血行動態を評価し、その後、内視鏡的治療を行った食道静脈瘤 171 例を対象とし、EVL 111 例、EIS 60 例の累積非再発率を検討した。その結果、左胃静脈前枝系が主たる供血路であり、静脈瘤に並列する他の側副血行路を有さない症例では EIS に比し EVL の再発率が有意に高く、傍食道静脈一穿通枝系の供血路を有する症例では EIS と EVL の治療成績は同等であることが判明した。「EVL で済む症例か? EIS を行うべき症例か?」を明確にすることができ、EUS は治療に役立つ血行動態診断法である。胃静脈瘤治療は内視鏡的塞栓術、バルーン閉塞下逆行性経静脈的塞栓術 (B-RTO) が主たる治療法であり、特に B-RTO は 2006 年 12 月までに 34 例に施行し、3 年累積非出血率 93.7%、3 年生存率 83.6% の成績を得ている。3 次元 CT angiography が胃静脈瘤の血行動態診断および治療後の評価に有用である。今後、EUS 所見を含めた多変量解析による食道静脈瘤の再発因子、非アルコール性脂肪肝炎 (NASH) に伴う食道胃静脈瘤の病態についても検討を進める予定である。

#### 4. 高齢者における肺炎球菌ワクチン接種による抗体濃度の推移

(衛生学公衆衛生学二)

小島原典子

〔目的〕本研究では、高齢者においてインフルエンザワクチンと肺炎球菌ワクチンの同時期接種が、安全であり、また発症予防に有効な抗体価の上昇を認めるかを検討するために、14 種の肺炎球菌莢膜多糖体特異的 IgG 抗体濃度の接種 1 ヶ月後、1 年後、2 年後の推移を検討した。〔対象と方法〕2005 年 9 月一診療所の健診受診者のうち、65 歳以上の希望者 13 名に対し、2005 年 10 月に 23 価肺炎球菌ワクチン (ニューモバックス、萬有製薬; PPV23)、11 月に全例インフルエンザ HA ワクチン「生研」(デンカ生研) を接種した。PPV23 とインフルエンザワクチンの両方を接種した群を PPV23 接種群 ( $n=13$ ) とし、インフルエンザワクチンのみを接種した 10 名を PPV23 非接種群とした。〔結果〕局所疼痛を PPV23 接種後 1 名に認めしたが、重篤な副作用はなく、検討した全莢膜型に対してワクチン接種後に有意な抗体濃度上昇が得られた ( $p<0.05$ )。特に 3, 4, 12F 型の既存抗体濃度は低かったが、ワクチン接種によって発症予防に有効といわれる  $1\mu\text{g}/$

ml 以上となった。14 種のすべての莢膜型で  $1\mu\text{g}/\text{ml}$  以上を有しているが、3, 4, 12F 型では、接種後の抗体濃度の平均が  $2\mu\text{g}/\text{ml}$  前後と低く、 $1\mu\text{g}/\text{ml}$  以上の症例は、それぞれ 77, 54, 62% であった。今後 1 年後、2 年後の抗体濃度の推移を検討し合わせて報告する。

#### 5. 糖尿病黄斑浮腫における視力と網膜微小循環・網膜厚との関連性

(眼科学)

酒田久美

〔目的〕糖尿病黄斑浮腫 (DME) における視力と、中心窩周囲毛細血管の血流速度および中心窩網膜厚との関連性について検討した。〔対象および方法〕対象は 60 例 60 眼で、DME あり 22 例、DME なし 22 例、正常対照群 16 例である。血流速度は走査型レーザー検眼鏡 (SLO) を用いた蛍光眼底造影により、中心窩周囲毛細血管網の中を流れる蛍光色素塊を検出し、Trace 法にて解析した。網膜厚は光干渉断層計 (OCT) にて測定した。それぞれの結果と log MAR 視力との関係について解析した。〔結果〕log MAR 視力は DME ありで  $0.32\pm 0.42$ 、DME なしで  $-0.07\pm 0.14$ 、正常対照群で  $-0.26\pm 0.13$  と有意差がみられた ( $p<0.0001$ )。黄斑部血流速度は 3 群間で有意差があり ( $p<0.0001$ )、血流速度と網膜厚とは負の相関がみられた ( $r=-0.4018$ ,  $p<0.0001$ )。また log MAR 視力と血流速度とは負の相関 ( $r=-0.644$ ,  $p<0.0001$ )、網膜厚とは正の相関 ( $r=0.640$ ,  $p=0.0013$ ) がみられた。重回帰分析では網膜厚のみが視力と有意な相関を認めた ( $p=0.0001$ )。〔結論〕DME では黄斑部血流速度が有意に低下し、血流速度は網膜厚と相関していた。またそれぞれ視力とも有意な相関が認められた。視力に最も影響を与える因子は網膜厚であったが、血流速度も DME 発症や進展に関与し、間接的に視力に関連していると考えられた。

〔一般演題〕

#### 1. 女子医学生の精神的健康度について

(女性生涯健康センター)

檜垣祐子・

渡邊郁子・加茂登志子

近年、大学生の心身の健康支援が重要なテーマとなりつつあり、国立大学では昨年、大規模調査が行なわれ、その結果が今後の学生支援に活用されることが期待されている。

当センターで施行した患者の QOL およびボディイメージと精神的健康度に関するアンケート調査において、対照一般人として女子医学生、6 学年 384 名の協力を得た。任意のため、全学生の実像を示すものではないが、女子医学生の精神的健康度を知る手がかりになると考えその結果を報告する。

調査は自記式の質問紙 (WHO-QOL26, ボディイメージ: CBIS, EDI のやせ願望, 体型への不満, 精神的健康度: GHQ30, CES-D, LSAS-J) によるアンケート調査で、その結果、QOL26 は各領域の平均  $3.59\pm 0.45$ , CBIS